

2. 環境保全業務報告

2.1 京都大学環境ファクトシート エコ〜ると京大 2020 活動報告

エコ〜ると京大メンバー

(白井亜美、奥野真木保、田中千尋、森本成美、
梶田詩織、吉村龍典、浅利美鈴)

2.1.1 はじめに

「エコ〜ると京大」とは、エコ×世界（ワールド）からの造語であり、「Think Globally, Act Locally, Feel in the Campus!」のメッセージを込めると同時に、本学内でのエコを学ぶ学校（École フランス語で学校の意）を多様な形で開校する意味を込めたものである。

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指して、今年度も様々な企画を実施した。

2.1.2 初夏の陣、オープンラボ

「勝手に集中講義！！超 SDGs 入門」

6月18日・20日、両日8:45～20:45に17名の京都大学の先生方を招き、オンラインによるオープンラボを開催した。持続可能・SDGsについて一人ひとりが視野を広げてこれからどのように社会と向き合うべきか考えるべく、多岐にわたる研究がなされている京都大学という場所で、多種多様な研究分野の先生方に「持続可能性」というテーマに対してどのように考えているのか伺った。オンライン開催ではあったが、日本全国に加え、海外からの視聴者もあり、約400名の方々、そして小学生から社会人ま

で幅広い年齢層の方々にお越しいただけたことを大変光栄に思った。

事前に山極壽一総長より、本企画に対してのメッセージを頂いた。長年の歴史を持つ総合大学である京都大学だからこそ得られる知識や着眼点を大切にしていきたいと感じた。

(↓山極壽一総長から本企画へのメッセージ動画
<https://www.youtube.com/watch?v=6LFW9IbFb-Q>)

以下のような90分×16コマの時間割で、吉田キャンパスのみならず宇治や桂、更には課外授業として左京区大原から、オンラインという点を活かして様々な場所から2日間で計24時間の中継を行った。

ご登壇頂いた先生方一覧（順不同）

- ・山敷庸亮先生 総合生存学館（惑星水資源、太陽系外惑星）
- ・高橋良和先生 工学研究科（土木構造物、メタボリズム）
- ・石見拓先生 健康科学センター（疫学研究、蘇生科学）
- ・福島誠子先生 野生動物研究センター（国立公園、エコツーリズム）
- ・大山修一先生 アジアアフリカ地域研究研究科（生業研究、環境利用）

- ・矢野順也先生 環境科学センター（廃棄物、ライフサイクルアセスメント）
- ・角山雄一先生 放射性同位元素総合センター（放射線教育、生物影響）
- ・田島知之先生 宇宙総合学研究ユニット（霊長類学、食物分配）
- ・佐野宏先生 国際高等教育院（言語論、古代の日本語）
- ・酒井敏先生 人間・環境学研究科（フラクタル日除け、大気・海洋の力学的構造）
- ・久野愛先生 経済学研究科（経済史、食品産業）
- ・宮野公樹先生 学際融合教育研究推進センター（学問論、大学論、異分野融合）
- ・矢野浩之先生 生存圏研究所（セルロースナノファイバー、木材）
- ・野中铁也先生 工学研究科（鉄ミネラル）
- ・熊谷誠慈先生 こころの未来研究センター（仏教学、ブータン学）
- ・浅利美鈴先生 地球環境学堂（環境教育、ごみ問題）

各講義でははじめに、先生方の「かばんの中のプラ」をとともに数えて身近なものから「持続可能性」について考えた。ほとんどの先生方に共通して、PCのプラグが多々見受けられたことが印象的だった。また、先生方からは「プラなしではやっていけない」という声が多かった。

その後、各先生方が普段どのような研究をされているのか、研究室・実験室紹介を交えながらお話ししていただいた。様々な分野の研究室や実験室を一度に見ることができる機会はなかなか無く、とても貴重な機会となった。置かれていた実験器具や本に対して、参加者の皆様からも「これは何？」という質問が多数寄せられ、日常生活では見慣れないものを多々ご覧いただけたようだ。続いて、先生方が現在の研究に至るまでにどのような出来事があったのか、その経緯などをお聞きした。様々な年齢層の方々が視聴されている中で、自分自身と照らし合わせる方も多かったことと思われる。

各講義後半では、リアルタイムで参加者の皆様からもたくさんのコメントを頂きながら、本企画のテーマでもある「持続可能性」について各先生方の考えを伺った。「持続可能性」という抽象的なテーマに対して、何をもって持続できていると呼ぶのか、どこが持続の原点なのか、1つの物事も視点によって持続可能なのか不可能なのか変わるのではないかなど各先生方の今までの経験や研究内容を踏まえて多種多様な方向へと深く議論を掘り下げることができた。決して人間だけの問題ではなく、高い倫理観も必要となるテーマだが、たくさんの先生方の考え方をお伺いし、正解のない問いが世の中には溢れているということも実感した。だからこそ、一見関係ないと思いがちな部分にも足を踏み入れ、様々な視野を得ることが重要だと思った。

各日8コマ終了後には、ご登壇された先生方も含め参加者の皆様とオンライン交流会を行い、興味の赴くままに「持続可能性・SDGs」というテーマについて討論した。中には小学生・中学生も参加してもらい、学校でできるコロナ対策×エコなど身近な部分にもたくさん考えるべき話題はあることを実感した。

本企画終了後には、吉田キャンパス構内ショッフルネの書籍コーナーにて、ご登壇された先生方の「大学生のうちに読んでおいて欲しい本」の特設コーナーが設置された。各先生方の研究内容に則した様々な分野の本が並んでいるほか、漫画版「風の谷のナウシカ」については複数人の先生方がおすすめされていたことが印象的だった。

最後に、初めてのオンライン開催となったが、オンラインだからこそその良さを最大限に活用できた企画となった。視聴者の皆様が、自身の興味の赴くままに学び、そこから「持続可能性」について考え、自分なりに行動していくきっかけとなれば幸いである。

2.1.3 SDGs 問答

SDGs 問答とは、様々な方をメインスピーカーとしてお招きし「持続可能性・SDGs」をテーマに、問答する企画である。国連の持続可能な開発目標

「Sustainable Development Goals (SDGs)」には、環境・社会を網羅する 17 のゴールが掲げられている。英語で、数も多く、とっつきにくい、一つひとつ見ていくと、私たちの日々の暮らしにも根差したものであり、総体としてみると、社会や街の理解につながることが分かる。本企画では、様々な方をメインスピーカーとしてお招きし「持続可能性・SDGs」をテーマに、ぶっつけ本番の問答をした。

記念すべき第一回は 7 月に実施され、メインスピーカーは、日本の人類学者、霊長類学者にして、ゴリラ研究の第一人者である山極壽一先生（京都大学第 26 代総長）だった。小学生からシニアまで多世代・多分野の 17 人によって身近な疑問から、時空を超えた問いかけまで、繰り広げられた。

第二回は 8 月に 3 人の知の巨人による豪華セッションで行われた。スピーカーは解剖学者・養老孟司先生と細胞生物学者で歌人でもある永田和宏先生（JT 生命誌研究館館長）、山極壽一先生だった。

第三回目となる SDGs 問答は、科学技術・文化などの力で、ワクワクしながら、SDGs を実践するためのセッションとして 12 月に実施された。メンバーは JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）理事 佐伯浩治氏、京都市長 門川大作氏、御殿場市長 若林洋平氏、2025 年日本国際博覧会協会 広報戦略局長 堺井啓公氏の 4 名だった。主に学生からの問いかけに、4 人の方々が温かく応えておられる様子だった。

2.1.4 祇園祭の御神輿の担ぎ手（輿丁）の方々から学ぶ特別な 7 月 ～SDGs・持続可能性 特別勉強会～

2020 年の祇園祭は、新型コロナウイルス感染症の流行によって例年通りには開催されなかったが、疫病退散を願う神事は実施された。このような状況下において祇園祭を知らない学生や一般の方々に 1151 年目を迎える祇園祭のについて学んでもらうこと、神輿に関わる皆様の熱い思いを知ることで継続してきた理由やこれからの持続可能性を考えるためのヒントを学ぶことを目的にオンライン勉強会を

開催した。三条台若中の皆様のご協力の下、2020 年 7 月 24 日に実施された神馬が神様の乗り移った三本の櫓を背に乗せて町中を練り歩く「御神霊渡御祭」にあわせて約 5 時間に及んで行った。オンライン上で合計 60 名程度に参加いただいた。

この勉強会のメインコンテンツは祇園祭の御神輿の担ぎ手（輿丁）の方々へのインタビューである。本来の祇園祭であれば御神輿を担いでおられる輿丁の方々が御神霊渡御祭の隊列に同行されている様子の中継した。輿丁の山田佳孝さん、清水武夫さんにご協力いただき、中継では神輿に対する熱い思いや御神霊渡御祭となった今の思いだけでなく、神輿渡御の際の場所に紐付いた思い出などもお伺いすることができた。神輿の同じ場所を担ぎ続けることでできるコブ、かけ声で盛り上がる場面とは一変して厳粛に執り行なわれる神事、雨に打たれながら「ホイットホイット」というかけ声をかけて神馬を見守っていた様子などが特に印象的だった。清水達也さん、佐分淳志さん、田中淳さんの 3 人からは自分にとって祇園祭・神輿はどのような存在であるかをお伺いした。どの輿丁さんからも神様の乗る神輿を昇くことへの誇りや神輿渡御に携わることができることへの感謝の思いを持っておられることが伝わってきた。

勉強会の中では祇園祭や神輿についての理解を深めるために、『イラスト祇園祭』（下間正隆, 2014）を用いた祇園祭全体に関する解説と、吉川幸宏さん（公益財団法人祇神会 副理事長）による神輿から見た祇園祭に関する講義が行われた。神輿からみた祇園祭では、神輿の起源や歴史についてのお話いただき、神輿に使われていた神様の乗られる御座の紹介などもしていただいた。吉川幸宏さんには勉強会において、執り行なわれている御神霊渡御祭や視聴者の疑問に対して歴史的な背景も踏まえた解説をしていただいた。

また、三条台若中の会所の近くであり神輿渡御の際には神輿が通る三条会商店街では商店街でお店を営まれている脇田実さん、澤井年弘さんにお話をお伺いした。当日は上田照雄さん（三条会商店街会長）、

田中正人さん(三条会商店街理事長)のお二人と中継を行い、神輿をお迎えする側のお話を伺った。今回の御神霊渡御祭でも神事が執り行なわれた又旅社の掃除を定期的に行っておられることから、商店街の方々にとっても祇園祭は神様をお迎えする大切な行事であることを知ることが出来た。

この勉強会を通して、神輿渡御そして祇園祭は多くの人が関わり、一人一人がこれまで継承されていることを行い続けることによって支えられているということが実感できた。また、興丁さんへの中継インタビューの中では興丁としての誇りや担ぐことへの感謝の思いだけでなく、担ぐこと自体が楽しく、血が騒ぐといった思いもお伺いした。興丁の皆様一人一人の熱い思いが力となり、これまでの長い間祇園祭、神輿渡御は続いてきたのだということも学ぶことが出来た。改めてこの勉強会に関わり、撮影や当日の中継などご協力いただいたすべての方に感謝したい。

2.1.5 マイボトルダンス曲の制作と普及活動

レジ袋有料化、プラスチック製ストローの廃止等脱プラの動きが急速に進む一方、プラスチックは現在の便利な生活に欠かせず、プラスチックといかにして付き合うかという難しい問いがある。その中エコ〜るど京大では「みんなのプラ・イド革命」というムーブメントを興した。この「みんなのプラ・イド革命」の一つにマイボトルの推進活動がある。マイボトルをもっと活用したい、そして活用してもらいたいとの思いからダンス動画を見たり実際に踊ったりして楽しむことを提案した。

作詞をエコ〜るど京大メンバーの白井亜美が担当し、作曲を音楽家の鈴木崇さんをお願いしてオリジナルの歌「トキメキ☆マイボトル」を作り、そこに振付をして、マイボトルダンスを製作した。お気に入りのマイボトルをもって毎日を過ごすちょっとした特別感を歌とダンスに込めている。

現在までに 16 団体がマイボトルダンスにご参加くださり、JST エコプロオンラインセミナーでの紹介、エコ〜るど京大で行った配信企画【今日も明日も

SDGs】での紹介、SDGs Kyoto times という YouTube チャンネルにてダンスの見本動画だけでなく練習用の鏡バージョン、振付をゆっくりと解説した動画、ご協力していただいたマイボトルダンスを集めた動画を公開している。今後も企業団体にとどまらず個人からも気軽に投稿し発信してもらうこと、そして様々なイベントと組み合わせてもらうことを目指し活動を続ける。

2.1.6 「食のバラバラボ」始動

食品ロス削減を目指すプロジェクト、「食のバラバラボ」を始動した。食材を各部位に「バラバラ」に分解し、野菜の皮や種といった捨てられがちな部分の価値や、それらを捨てずに活用する方法を研究し、発信する。8〜9 月にかけて 2 回にわたり、オンラインでミーティングを行った。第 1 回目のミーティングでは、かぼちゃをテーマに、部位ごとの特徴や栄養素等を調査・分析し、捨てられがちな部分の活用方法を議論した。第 2 回目はエコ〜るど京大メンバーに加え、坂辻亮シェフ (Pasto Generale 経営)、山下満智子先生 (京都大学非常勤講師) をゲストにお招きし、議論を深めた。ミーティングと試作を経て、かぼちゃの捨てられがちな部分を使ったレシピ 3 品、「丸ごとかぼちゃサラダ」「わたと種の揚げドーナツ」「かぼちゃの種クランチ」を考案した。これらのレシピとミーティングの様子は動画および写真で、エコ〜るど京大 HP、Facebook、Twitter、YouTube にて公開している。

また、11 月 8 日には、京都市内で開催された『消費者庁ライブシンポジウム「みんなで知ろう！取り組みもう！食品ロス削減」』にパネリストとして登壇。プロジェクト内容や今後の展望について紹介し、意見交換を行った。

1 月には、京都市主催の令和 2 年度 (第 18 回) 京都環境賞において佳作を受賞。今年度のテーマは「ウィズコロナ時代に暮らしの中でできる環境にいいこと」。環境保全と感染防止を両立させるアイデアとして、全 180 件の応募の中から賞をいただいた。

2.1.7 「今日も明日も SDGs !」 オンライン発信

2020 年 11 月 11 日から 12 月 4 日の平日 17 日間にオンラインで SDGs について考える番組「今日も明日も SDGs !」を発信した。エコ〜るど京大メンバーがパーソナリティとなり、朝 6 時 45 分から 7 時 15 分の 30 分間生配信した。また、その内容を夜にも再放送する形での発信を行った。この企画は、SDGs を自分事（じぶんごと）にすること、新たな視点から SDGs を捉え直すこと、コロナ禍を乗り越えて環境配慮・SDGs 達成を一層促進する挑戦について学ぶことを目的としている。合計 140 名程度がオンライン参加し、アーカイブ配信は各回 95~450 回程度視聴されており、多くの方に視聴頂いたことに変感謝している。30 分間の番組内では以下のような内容を配信した。

[1] マイボトルダンス

マイボトルダンスは、マイボトルの普及を目指して作成したエコ〜るど京大のオリジナルダンスです。今回は企画に賛同している合計 15 の企業や団体の皆様に踊っていただくことができた。企業のキャラクターによるダンスや、歌詞つきのダンス動画、会社内の多くの人が協力して完成しているダンスなど、一つ一つの動画に特色が現れており、どのダンスもとても楽しむことができた。以下が参加いただいた企業、団体の一覧である。

アクアクララ株式会社、株式会社リコー、株式会社 ecommit、安田産業株式会社、京都大学ラグビー部、京都市、日本たばこ産業株式会社、セブン&アイホールディングス、ソフトバンク株式会社、SPANGLE、東京都環境公社、三洋化成工業株式会社、象印マホービン株式会社、合気道団体 精晟会都筑、大丸松坂屋百貨店（出演順）。

[2] 1 日 1SDGs

その日のテーマとなっている SDGs ゴールについて、より深くそして新たな視点から考えるためのコーナ

ー。まずはテーマとなる SDGs ゴールのターゲットや取り上げられている課題を 1 分で学ぶ、くすちゃん解説で始まる。その後、最近のニュースや日本での取り組み事例、エコ〜るど京大の取り組みなどメンバーそれぞれの視点からゴールの紹介を行った。そしてこのコーナーの最後には、日常生活の中から SDGs に貢献するために取り組むことを宣言する「今日の SDGs 行動宣言」を行った。SDGs を初めて知る人にも、よく知っている人にも楽しんでいただくことができた。

[3] グリーンリカバリーのすすめ

新型コロナウイルス感染症の流行を乗り越えて、経済復興と環境配慮や SDGs・持続可能性を促進する活動を行う企業や団体からその取り組みをご紹介します。合計 17 の企業・団体に参加いただき、コロナの流行以降に新たに行う SDGs への取り組みだけでなくコロナの流行以前から実施されてきた取り組みの内容についても学ぶことができた。以下がその企業・団体名である。

一般社団法人サステイナブルフードチェーン協議会、川上産業株式会社、株式会社リコー、株式会社 ecommit、安田産業株式会社、カシオ計算機株式会社、京都市、御殿場市、セブン&アイホールディングス、ソフトバンク株式会社、ボトルト、ATable、三洋化成工業株式会社、UNOPS GIC、日本マクドナルド株式会社、光海株式会社、凸版印刷株式会社、大丸松坂屋百貨店（出演順）。

[4] バラバラボ

合計 10 回にわたって、捨てられがちな部分を使ったレシピや捨てられがちな部分の価値について議論した様子、メンバーが食品ロス削減に向けて取り組んでいることなどを紹介した。レシピ紹介の際にはカボチャの種を使ったチョコクランチの試食も番組中に行った。

[5] 世界の国から SDGs

京都大学の留学生が、母国がどのような国であるのか、そして自国で行われている SDGs に関連する取り組みについて発表した。登場順に中華人民共和国、中華民国、ブルガリア、ソロモン諸島、タイ、モザンビーク、インドからの留学生に参加してもらった。世界の国々で SDGs 達成に向けた取り組みが行われていること、SDGs の課題に直面している現状などを知ることができた。SDGs は国際目標であること、日本以外の世界にも目を向けて考えることの重要性も実感できたコーナーだった。

そのほかにもその日のテーマとなっている SDGs のゴールに関するクイズを出題する「今日の SDGs クイズ」や普段の生活の中で見つけた SDGs 的な事柄について視聴者の方が投稿して下さった内容を紹介するお便りコーナーなども行った。小学生から社会人まで幅広い方にご参加頂き、番組を盛り上げる事が出来た。

2.1.8 Kistory2020 のオンライン開催

12 月 18 日に初の完全オンラインにて Kistory2020 というイベントを開催した。

Kistory とは、使わなくなった着物を持ち主からいただき、今後使用していく若者に渡し、人と人とのつながりを通して魅力ある着物を再度活用していく企画で京都大学の学生団体、京都着物企画との共催で運営している。

今回は初のオンライン開催ということで、参加者に着物と帯のセットをあらかじめ郵送でプレゼントし、当日は zoom にて着付けに必要な小物の紹介や動画を使つての着付け方の説明などが行われた。参加者は 23 人と盛況で、留学生や遠方にお住まいの方にも参加していただけた。オンラインでの開催は初の試みであったが、遠方の方でも参加できたり着付け方の説明等を動画に残していつでも見返せたりと利点も多く、参加者からも喜びの声が寄せられた。コロナ禍の中でもこういった手段を用いて着物文化やリユースの精神を広げる一助となるイベントができたことは非常に有意義であり、今後の見通しも立たない中で、イベント開催の新しい形を提案する良いものとなった。